

自称詞用法の「自分」の許容度を上げる要因 —「主語・主題」に位置する「自分」について—

What increases the acceptability of first-person *Jibun* in the subject/topic position?

金 雪花

要旨

日本語の「自分」は、照応用法のみが統合論的な観点から注目され活発な研究が行われてきた。一方、非照応用法に関しては十分な研究が行われず、特に自称詞用法に関しては「中国地方の方言」・「軍隊用語」・「体育会系の若い男性用語」といった社会言語学的な観点から議論されることが多い。本研究では、「自称詞用法の「自分」の使用意識と許容度」に関するアンケート調査の分析と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の実例に基づく分析を通して、文法的な観点を中心に、自称詞用法の「自分」の許容度を上げる要因を考察した。その結果、「統語構造」・「文脈」という 2 つの観点から「言語内的要因」を明らかにし、また、「話し相手や場」を意識した場面・「他の自称詞との区別」を意識した場面という 2 つの観点から「言語外的要因」を明らかにすることができた。

キーワード：「自分」 自称詞用法 許容度 言語内的要因 言語外的要因

1 はじめに

日本語の「自分」には主に以下の用法がある。

- ① (省略を含めて) 何らかの先行詞を持つ用法 (以下「照応用法」: 例 1、例 2)
 - ② 先行詞を持たない用法 (以下「非照応用法」)
 - a) 広くあらゆる人を指す用法 (以下「汎指用法」: 例 3)
 - b) 自称詞・対称詞として使われる用法 (以下「自称詞用法」: 例 4、「対称詞用法」: 例 5、両者を一括する場合は「人称詞用法」)¹
- (1) 太郎は自分の夢を叶えるために、頑張っている。(照応用法)
 - (2) 太郎の頭の中には、「打算」という言葉はない。自分ができることで、世の中のために尽くしたいと思っているだけである。(照応用法—省略)
 - (3) 自分のことを大事にするべきである。(汎指用法)
 - (4) 自分は広島出身です。(人称詞用法—自称詞用法)
 - (5) ご自分はどう思いますか。(人称詞用法—対称詞用法)

¹ 「対称詞用法」は方言に限られることが多く、共通語での「対称詞用法」は「ご自分」という形しかない。本研究では「自称詞用法」のみを対象にする。

照応用法の「自分」に関しては、Chomsky(1981)が提唱した普遍文法を構成する下位理論の一つである「束縛理論(Binding theory)」の枠組みで、活発に研究が行われており、「主語志向性」(柴谷 1985)、「長距離束縛」(三原 2006)、「逆行束縛」(三原 2006)などの現象が注目されている。

- (6) 太郎_iは花子_jに自分_iのノートを見せた。(照応用法—主語志向性)
- (7) 太郎_iは花子_jが自分_iを愛していると思っている。(照応用法—長距離束縛)
- (8) 自分_iがハンサムではないことが太郎_iを悩ませた。(照応用法—逆行束縛)

一方、非照応用法の「自分」に関しては、十分な研究は行われていない。三原(2006)で「文中に先行詞を持たない「自分」が可能であるという事実があり、この事実は「自分」を照応形とする立場との間に齟齬をきたす」と述べられているように、統合論の立場からは許容されないものとして見られがちであった。

2 先行研究と問題の所在

日本語記述文法研究会(2009)では、「一般に「自分」は、主語と同じ指示対象を指示する再帰代名詞として用いられる」と定義し、「自分」は話し手自身を指す1人称の人称代名詞としても用いられることがあると提出している。本研究では、下記のように、「私」のような1人称の人称代名詞として使われる「自分」の用法を「自称詞用法」と称する。

- (9) 自分は広島生まれです。(日本語記述文法研究会 2009、現代日本語文法 7: 41)

自称詞用法の「自分」については、次の枚浦(1993)で述べられているように、社会言語学的な観点に偏ってきた。「自分」は自分であり、自称(1人称)として、その使用は他の語と比べて新しく、日本の近代化の中で定着してきた語である。特に軍隊用語の自称語として使用され、それが軍隊が消滅してからも階級や上下を極めて重要視する団体などを通して、一般に広がっていったものである。現在でも大学の武道系団体の場合、各地からの学生が集まっているところなどでは、1人称に「自分」を使用することが多い。(p.35)

田窪(1997)も、次の例10を以て、自称詞用法の「自分」を中国地方の方言や軍隊用語として位置付けている。

- (10) 自分がやります。(田窪 1997: 36)

また、廣瀬(1997)も、次の例11を以て、自称詞用法の「自分」について、軍隊で上官と話をしている軍人や運動部・応援団などで先輩と話をしている硬派の男性部員などを連想させる用法であると述べている。

- (11) 自分は反省しております。(廣瀬 1997: 19)

最近の研究では、自称詞用法の「自分」におけるより広まった使用範囲を認める研究も少なからず見受けられる。荻野（2007）は、大学生を対象に行ったアンケート調査を基に、「男性の自称詞は「自分」という言い方がかなり多く、「おれ、ぼく、わたし」といった男性に従来からよく使われてきた自称詞に並ぶ勢力になっている」（p.371）と指摘している。石黒（2013）も「自分」は男子を中心に使われている新しい形式の自称詞であると主張している。しかし、荻野（2007）で「丁寧に接すべき人に対してよく使われる傾向がある」（p.371）と述べられ、石黒（2013）で「上の立場にある人の指示に従う意思表示である」（p.176）と述べられているように、依然として待遇関係や使用意識など社会言語学的な観点に捉われた限界が存在し、文法的な観点による分析が欠けている。

本研究では次の2点を研究目的とする。①統合論の立場から許容されないものとされてきた自称詞用法の「自分」は、実際には許容されており、文構造や文脈により異なる許容度を示すことを検証する。②文法的な観点を中心に許容度を上げる要因を明らかにする。

3 研究方法

上述の目的を基に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJ）』の『Yahoo!知恵袋』と『書籍』²から抽出した実例及び実例を若干変更した例文³を用いてアンケート調査を行った。その際に、主語・主題位置の「自分」（「自分が」・「自分は」）⁴を対象にした。

² 『Yahoo!知恵袋』は話し言葉よりの特性を持った代表として、『書籍』は書き言葉の代表として用いることにする。

³ アンケート調査に用いた調査例文は、本稿の最後に載せて表5（p.80）と同じ順番に並べた。

⁴ 「主語・主題」に位置する「自分」に限定する理由は、この場合において自称詞用法の「自分」が出現しやすいからである。すなわち、田窪（1997）で述べられているように、「自分」は、それ自身指示対象を持たず、先行詞によって指示対象を与えられる。（中略）しかし、「自分」自体が「主語・主題」の位置にある場合、さらに上の先行詞を要求する。（中略）つまり、全体として話し手に関わることであれば、話し手を語用論的に先行詞としてとるわけである。」

実際、『BCCWJ』の中納言コアデータを用いて、「自分」と共起する助詞（格助詞と係助詞の「は」）の例文の中で占める自称詞用法の用例数と割合を検証してみたところ、「自分は」と「自分が」の例文は、用例数がそれぞれ19例と16例、割合がそれぞれ40.4%と14.7%で、とりわけ高い数値を示した。

表1 各助詞の「自分」における自称詞用法の割合

助詞	用例数	自称詞用法	割合	助詞	用例数	自称詞用法	割合
が	109	16	14.7%	の	362	10	2.8%
から	12	0	0.0%	は	47	19	40.4%
で	108	0	0.0%	へ	2	0	0.0%
と	11	2	18.2%	より	7	0	0.0%
に	53	4	7.5%	を	62	1	1.6%

注：合計用例721例中、自称詞用法の用例52例（7.2%）である。

(i) 対象者

調査は日本人学部生を対象にし、96件の有効回答があった。調査対象の出身地は30都道府県となり、全国各地からの出身者が混ざっている。その中で、東京都(24人)、神奈川県(15人)、千葉県(8人)の出身者がトップ3位で、関東出身者が合計58人いた。

(ii) 調査票

調査票では、「例文の許容度に関する判断部分」と「質問部分」の2部分に分けている。「例文の許容度に関する判断部分」では、「主語・主題」に位置する「自分」を含める例文を提示し、「「自分」が自然かどうか」に関して4段階尺度を使って判断してもらった。「質問部分」では、①「私」という意味として「自分」を使うかどうか、②使うなら、どんな場面でどんな気持ちで使っているのか、また使わないなら、人が使うのを聞いてどんな印象があるのか、この2点に関して解答してもらった。

(iii) 分析方法

まず、第4節で自称詞用法の「自分」における使用状況の分析と許容度の分析を行う。その際、アンケート調査の分析と『BCCWJ』⁵の『Yahoo!知恵袋』と『書籍』における量的データの分析を用いる。次に、その分析を基に第5.1節で「統合構造と文脈」という文法的な観点を中心に、自称詞用法の「自分」の許容度を上げる「言語内的要因」を明らかにする。最後、調査票の「質問部分」における自称詞用法の「自分」を使用する場面の分析を基に、第5.2節で「言語外的要因」を考察する。

4 分析—使用状況と許容度に関して

4.1 使用状況における分析

4.1.1 アンケート調査における分析

表2は、「私」という意味で「自分」を使うかどうかの使用意識を示したものである。

表2 男女差から見た自称詞用法の「自分」の使用状況

	女性		男性		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
使う	15	53.6%	44	64.7%	59	61.5%
使わない	13	46.4%	24	35.3%	37	38.5%
合計	28	100%	68	100%	96	100%

⁵ 中納言における『Yahoo!知恵袋』の例文は質問と回答の部分が一緒になっており、後ほどの(前文脈があるか否かなど)詳細の分析において障害をきたすゆえ、2009年度版を用いる。

自称詞用法の「自分」の許容度を上げる要因
 —「主語・主題」に位置する「自分」について—

全体として「使う人」(61.5%)が「使わない人」(38.5%)の数を遥かに上回ったことが判明した。男女差の観点から見ると、女性に関しては、「使う人」(53.6%)の数が「使わない人」(46.4%)の数を少し上回り、ほぼ同じ割合を占めている。一方、男性に関しては、「使う人」(64.7%)の数が「使わない人」(35.3%)の数と比べてほぼ2倍の割合を占めている。これは、「自分」は男性により好まれる傾向があるが、従来の「体育会系の若い男性用語」というイメージと違って、場面によって女性も抵抗なく使用していることを示唆している。

4.1.2 『BCCWJ』における量的データの分析

自称詞用法の「自分」における実際の使用状況を『BCCWJ』を用いて検証してみた結果、統語論的に許容されないとされる自称詞用法の「自分」の例は、(特に「自分は」の場合に)数少なくないことが窺えた。

* 『BCCWJ Yahoo!知恵袋』において

「自分は」の例文と「自分が」の例文をそれぞれ無作為に200例ずつ抽出し、「自分」の各用法に分類した結果、自称詞用法の「自分」は、それぞれ67.5%と22.5%を占めている。

表3 自称詞用法の「自分」の分布

	用例数	全用例数	割合
自分は	135	200	67.5%
自分が	45	200	22.5%

* 『BCCWJ 書籍』において

「自分は」の例文と「自分が」の例文をそれぞれ無作為に500例ずつ抽出し、「自分」の各用法に分類した結果、自称詞用法の「自分」は、それぞれ23.6%と8.0%を占めている。

表4 自称詞用法の「自分」の分布

	用例数	全用例数	割合
自分は	118	500	23.6%
自分が	40	500	8.0%

4.2 許容度における分析

4.2.1 アンケート調査における分析

例文の中の「自分」が自然かどうかという4段階尺度に、それぞれ1点から4点を付けて統計分析を行った。そして、①「自分」の用法、②出典、③文中の「自分」の位置、④「自分」が文頭に立っているか否か、⑤「自分」の前に文脈があるか否かなどの文法的な観点から具体的に考察した。平均値の高い順に並べたのが、次の表5である。

表5 各例文における分析

	例文	合計	平均	標準 偏差	用法	出典	「自分」の 位置	文頭	前文脈 あり
	14	291	3.99	0.12	照応(1人称省略)	書籍	主節(単文)	×	○
★	10	291	3.99	0.12	自称(擬似汎指)	書籍	なし ⁶	×	○
	18	281	3.85	0.63	汎指	書籍	従属節 (名詞修飾節)	×	○
	16	276	3.78	0.71	照応(主語志向)	書籍	従属節 (名詞修飾節)	×	○
	13	273	3.74	0.74	照応(1人称省略)	書籍	従属節 (名詞修飾節)	○	○
★	11	273	3.74	0.70	自称(1人称心理)	書籍	従属節 (名詞修飾節)	○	○
	17	271	3.71	0.75	照応(逆行束縛)	書籍	従属節 (名詞修飾節)	○	×
★	12	269	3.68	0.70	自称(3人称心理)	書籍	従属節(引用節)	×	○
	15	260	3.56	0.95	汎指	知恵袋	従属節(引用節)	△ ⁷	△ ⁸
*	1	252	3.45	0.66	自称(対比)	知恵袋	主節(複文)	×	○
*	8	247	3.38	0.85	自称(皆の中)	知恵袋	主節(単文)	○	○
*	3	241	3.30	0.82	自称(流れ)	知恵袋	主節(単文)	○	× ⁹
*	6	228	3.12	0.92	自称(客観性)	知恵袋	主節(複文)	×	○
*	4	223	3.05	0.99	自称(擬似汎指)	知恵袋	主節(複文)	○	○
#	7	216	2.96	0.91	自称	知恵袋	主節(単文)	○	×
#	9	201	2.75	0.99	自称	知恵袋	主節(複文)	○	×
#	5	170	2.33	1.11	自称	知恵袋	従属節(時間節)	○	×
#	2	167	2.29	1.08	自称	知恵袋	従属節(時間節)	×	×

表5から分かることを、簡単にまとめると次のとおりである。

- ① 自称詞用法の「自分」に関しては、出典から言うと、『書籍』で出現する例文は、すべて『Yahoo!知恵袋』で出現する例文より許容度が高い。
- ② 自称詞用法を含め、各用法のすべての例文において高い数値を示している。

⁶ 「なし」と表記したのは、この例文には「自分」が2つ存在するからである。前者は従属節の中に含まれていて、後者は主節の中に含まれている。

⁷ 調査例15の「いくら自分は絶対良い大学に入りたいと思っていても…」では、「自分」の前に存在する副詞の「いくら」は述語を修飾しているだけで、「自分」に対しては何の役割も果たしていない。したがって、ここでの「自分」は、文頭に立っている場合と文頭に立っていない場合との境界レベルだと見なし、「△」で表す。

⁸ 調査例15の「いくら自分は絶対良い大学に入りたいと思っていても…」では、「自分」の前に「いくら」という語が存在するが、内容に直接的に影響しない。よって、ここでの「自分」は、前文脈がある場合と前文脈がない場合との境界レベルと見なし、「△」で表す。

⁹ Dさんの発話だけを見る際に、「自分」の前には文脈がないので、ここではとりあえず「×」とするが、他の例文と異なり、例3は何人かの会話の中にある発話であることに注意されたい。

③ 分析の便宜上、自称詞用法の「自分」の例（例 1～例 12）を平均値の高さの度合によって 3 段階¹⁰に分けてみた結果、次のことが言える。

*** 第 1 段階**

自称詞用法の「自分」は、前文脈があり且つ従属節の中に含まれている場合、あるいは、前文脈があり且つ文頭に立っていない場合に、特に高い許容度を示している（調査例¹¹10・11・12）。これらの場合、「汎指用法」や「照応用法」の例文よりも許容度が高くなり得る。

*** 第 2 段階**

自称詞用法の「自分」は、前文脈があっても、主節の中に含まれたり文頭に立ったりすると、本来は許容度が低いはずである。しかし、特定の文脈が窺える場合は、許容度が上昇する（調査例 1・8・3・6・4）。具体的には、第 5.1.2 節で論じることにする。

*** 第 3 段階**

自称詞用法の「自分」は、前文脈がなく、且つ主節の中に含まれたり文頭に立ったりすると、許容度は比較的になくなってしまいう（調査例 7・9・5・2）。

4.2.2 『BCCWJ』における量的データの分析

表 6 は、3 つの指標における自称詞用法の「自分」の分布を示したものである。この表から『Yahoo!知恵袋』において、文頭に立つ場合と主節の中に含まれる場合が遥かに多く、前文脈がない場合も『書籍』と比べて比較的が多いことが分かる。これが、『書籍』で出現する例文が、すべて『Yahoo!知恵袋』で出現する例文より許容度が高い結果となった原因のように思われる。

表 6 3 つの指標における分布

		前文脈あり	割合	文頭	割合	主節	割合
『Yahoo!知恵袋』	○	144	80.0%	109	60.6%	109	60.6%
	×	36	20.0%	71	39.4%	71	39.4%
	合計	180	100.0%	180	100.0%	180	100.0%
『書籍』	○	158	100.0%	71	44.9%	121	76.6%
	×	0	0.0%	87	55.1%	37	23.4%
	合計	158	100.0%	158	100.0%	158	100.0%

注：『Yahoo!知恵袋』と『書籍』における合計用例数は、それぞれ 180 例と 158 例である。

¹⁰ 「平均値が 3.50 以上」・「平均値が 3.00～3.50」・「平均値が 3.00 以下」を基準に分けた。そして、第 1 段階を「★」・第 2 段階を「*」・第 3 段階を「#」で表した。

¹¹ 第 5.1 節において再び具体的に論じるゆえ、ここでは例文番号のみを載せる。以下同様。

5 考察—自称詞用法の「自分」の許容度を上げる要因

コーパス分析とアンケート調査の分析に基づいて、以下、「言語内的要因」と「言語外的要因」に分けて、自称詞用法の「自分」の許容度を上げる要因を考察する。

5.1 言語内的要因

5.1.1 統語構造の観点

- ① 前文脈があることは、許容度が高くなる前提である。
- ② 前文脈があり且つ従属節の中に含まれている場合、あるいは、前文脈があり且つ文頭に立っていない場合、特に高い許容度を示す。

5.1.2 文脈の観点

上述の第 5.1.1 節の条件を満たさない場合、本来は許容度が低いはずであるが、その文の文脈が次のような場合は、許容度が上昇する。

- ① 文脈上、広くあらゆる人を表す汎指用法に擬似している場合、つまり、「擬似汎指の自称詞用法」の「自分」は許容度が上昇する。
 - (12) 世の中には「純粋な自分」はいないです。映画を見るときも、「人に話したい」と思っている自分がいて、本を読むときも、「すごい」と言われたい自分がいました。(調査例 10)
 - (13) 最近の配送会社は便利です。電話一本で取りに来てくれて、梱包もしてくれました。自分は家にいてお金を払うだけでした。(調査例 4)

上記の例 12、13 は、まず一般論を語った上で、私個人に限定して、自分の経験に繋がっているため自称詞用法と捉えられる。また、この場合の「自分」は、他の誰もが経験は異なるかも知れないが、その一般論に当てはまるという意味で汎指用法にも擬似している。このような「自分」の許容度は自然と高まるのである。

なお、同じく擬似汎指の自称詞用法であるこの 2 つの例は、許容度の差がある。その理由は検証が必要であるものの、「自分」が文頭に立っている例 13 と比べ、例 12 の場合は、「自分」の前に連体修飾節がついていることが許容度を上げている要因のように思われる。

- ② 文脈上、心理表現を表す自称詞用法の場合、許容度は上昇する。

- (14) 学生時代に一番嫌いだったのは、国語のテストのときに漢字に振り仮名を振りなさいという問題でした。なんて無意味な試験なのでしょう。自分がこれを読めるといことを先生に分かってもらっても何にもならないでしょう。(調査例 11)
- (15) 予想外の事態が発生してしまいました。代理母が生まれた子の親権を主張したのです。この子は自分がおなかを痛めて産んだのだ、だから自分の子だ、おまえには渡さない、と。(調査例 12)

この場合、例 14 のように 1 人称の心理表現を表すほうが、例 15 のように 3 人称の心理表現を表すより、許容度がより高くなる可能性がある。

- ③ 文脈上、自らというニュアンスを加え、「自分自身」を強調したり、**他者との比較**（を通じた違いや同意）を**強調**したりする場合、許容度は上昇する。

(16) 他の人はどうか分かりませんが、自分は子供は 2 人くらいほしいと思います。(調査例 1)

例 16 のように、「他人はともかく、あるいは他人とは違って」という「他人と比較した」自分独自の意見を強く主張する気持ちが文脈上传わる場合、許容度は高くなるのである。そして、この場合は、「自分」という言葉自体の性質によって、他者と自分をはっきり区別しつつも、丁寧さや柔らかさも失わない利点がある。

- ④ 文脈上、多人数の中で、「**集合の一員としての私**」について述べる場合、許容度は上昇する。

(17) 誰かの呼びかけに皆が黙っていると、鈴木さんはいつも「自分がやります」と手を挙げてくれます。(調査例 8)

例 17 のように、「大多数の中での自分」というニュアンスを表す場合や、多人数の討論などで、相手が自身の考えを述べてから、「あなたはどう。」と聞かれた場合に使われると、許容度は高まるのである。例えば、大学の授業における学生の発言などで良く使用される。

- ⑤ 上記の④の場合、「他の発話者たちが自称詞として「自分」を使っている状況で、「自分」を使う**流れができて**いる」場合は、普段「自分」を自称詞として使わない人であっても、許容度が高まることもある。

(18) A さん：皆さんは、女性は結婚してから働くべきだと思いますか。

B さん：自分は、女性は結婚してからは家庭中心にしたほうが良いので、仕事を止めるべきだと思います。

C さん：自分は、女性であるから結婚してからは仕事を止めるべきだというのに反対です。

D さん：自分もそう思います。もちろん両立は大変だろうけど、女性は結婚してからも仕事をする権利があると思います。(調査例 3)

- ⑥ 文脈上、自分自身のことでありながら、自分自身の言動を「私」という視点ではなく、**第三者の目線で自分を客観視**するニュアンスを帯びさせる場合、許容度は上昇する。

(19) 今の発表はすばらしい発表だと思いますが、自分は少し違う意見があります。(調査例 6)

この場合は、「あくまで私個人の考えですが」という譲歩のニュアンスを含めて、「私見なのであまり深く受けとめないでほしい」といった気持ちを伝えることで、「私」からの責任回避を達成する利点がある。

5.2 言語外的要因¹²

5.2.1 「話し相手や場」を意識した場面

① 自分をへりくだるような謙遜さを伝えようと、目上の人や初対面の人に対して良く使用する。

アンケート調査の対象者が学生であったこともあり、目上の人というのは、例えば先輩や先生などであるが、この場合、自分の立場を少し下げる感じで、丁寧でしっかりしているような印象を与えようとする。初対面の人と話すときは、普段友達と話すときと異なった自分を相手に積極的に示そうとする。両方とも、一定の距離を保ちつつ、主張が抑えられ、コミュニケーションが取りやすい印象を与えようとする気持ちがある。

② 硬派な感じや、ある程度の丁寧度を表そうと、部活の先輩に対して使用する。

ある程度の丁寧度というのは、敬語ほどではない、ということを表す。また、部活の場合、とりわけ体育会系の部活の場合、特にそうである。

③ フォーマルな場面に良く使用する。

フォーマルな場面で、自己紹介をしたり、意見を述べたり、プレゼンテーションをしたりするときや、かしこまった場面で公式な対応などで、良く使用する。

5.2.2 「他の自称詞との区別」を意識した場面

① 他の自称詞が適切でなく、消去法的な使い方を使用する。

これは、とりわけ男性の場合が特徴的であるが、「俺・僕・私」などの自称詞のバラつきが女性より遥かに多いためである。

この使い方の一つは、「無難で便利に使用する」というポジティブな心境の場合である。例えば、話し相手や気分や話の内容によって、「俺」では少し不作法であるが、「私」では少し堅苦しいし、「僕」では子供っぽいと感じられるとき、その中間的な表現として「自分」を使用している。または、「俺」か「僕」か「私」か、迷った場合に、無難に使えるものとして使用される。もう一つは、「仕方なく使用する」というネガティブな心境の場合である。

¹² 言語外的要因は、調査票において「私」という意味で「自分」を使う」と回答した59名の調査対象者が、「どんな場面でどんな気持ちで使っているのか」という質問に対するコメントを、抽出分類し、回答が一番多かった内容を筆者がまとめたものである。

例えば、「私」を使うほど他人ではなく、「俺」など俗な1人称を使うほど親しくない、あるいは同等な立場にいない場合に、他に無難な言葉が見付からず使用している。

② 一方、**女性の場合**は、大体は「私」を使うが、無意識に「私」の多用を避けて「自分」を使用する場合がある。

6 おわりに

本研究では、コーパス分析とアンケート調査の分析に基づき、自称詞用法の許容度を上げる要因を「言語内的要因」と「言語外的要因」の観点から明らかにした。文法的な観点を中心に考察した本研究は、自称詞用法の「自分」を統語論（束縛理論）の観点から「逸脱」したものと考える理論的枠組みに具体的なデータに基づいて疑問を提示し、また、従来の社会言語学的な議論の限界を乗り越えた点に意義がある。本研究では考察対象を「主語・主題」に位置する「自分」に限定しているが、自称詞用法の「自分」は格にかかわらず許容されると思われる。

しかし、以下の点では限界がある。①考察対象が「主語・主題」に位置する「自分」に限定されている、②コーパス分析では一定数の『Yahoo!知恵袋』と『書籍』のみを対象にしている、③アンケート調査では限られた範囲の「大学生」のみを対象にしている、④アンケート調査はあくまで使用意識に対する調査であって、使用実態とは必ずしも一致しない、という4点である。これらは全て今後の課題としたい。

参考文献

- 石黒圭 (2013) 「第7章 日本語の人称表現」『日本語は「空気」が決める』、pp.149-182、光文社
- 荻野綱男 (2007) 「最近の東京周辺の学生の自称詞の傾向」『計量国語学』25-8、pp.371-373、計量国語学会
- 柴谷方良 (1985) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』4-10、pp.4-16、明治書院
- 杵浦勝 (1993) 「自分」『日本語学』12-7、pp.34-38、明治書院
- 田窪行則 (1997) 「日本語の人称表現」『視点と言語行動』、pp.13-44、くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2009) 「第2章 指示、第7節 その他の指示の表現」『現代日本語文法』7、pp.37-43、くろしお出版
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」、廣瀬幸生・加賀信広著『指示と照応と否定』、pp.2-89、研究社出版
- 三原健一 (2006) 「第2章 束縛関係」、三原健一・平岩健著『新日本語の統語構造—ミニマリストプログラムとその応用』、pp.63-95、松柏社
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht, Foris

資料—調査例文

- (14) 私は今まで「相手に嫌われてしまうのではないか」という強迫観念にとらわれ、ひたすら周囲に適応しようとして無理を続けてきました。そんな自分がますます嫌いになっていきます。
- (10) 世の中には「純粋な自分」はいないです。映画を見るときも、「人に話したい」と思っている自分がいて、本を読むときも、「すごい」と言われたい自分がいました。
- (18) 世の中で生きていく上では、自分はどれだけ大事な存在なのかという意識を持つべきです。
- (16) 私はいつも、自分がやっていることはすべて自然にやっている気がします。
- (13) 離婚が決まって、私はとても後悔していました。自分がどれほどひどい言葉を相手に投げつけたかという明確な記憶が残っているからです。
- (11) 学生時代に一番嫌いだったのは、国語のテストのときに漢字に振り仮名を振りなさいという問題でした。なんて無意味な試験なのでしょう。自分がこれを読めるということも先生に分かってもらっても何にもならないでしょう。
- (17) 自分がエリートではないことが私を悩ませました。
- (12) 予想外の事態が発生してしまいました。代理母が生まれた子の親権を主張したのです。この子は自分がおなかを痛めて産んだのだ、だから自分の子だ、おまえには渡さない、と。
- (15) いくら自分は絶対良い大学に入りたいと思っても、成績が悪い分にはどうしようもないことです。
- (1) 他の人はどうか分かりませんが、自分は子供は2人くらいほしいと思います。
- (8) 誰かの呼びかけに皆が黙っていると、鈴木さんはいつも「自分がやります」と手を挙げてくれます。
- (3) Aさん：皆さんは、女性は結婚してから働くべきだと思いますか。
Bさん：自分は、女性は結婚してからは家庭中心にしたほうが良いので、仕事を止めるべきだと思います。
Cさん：自分は、女性であるから結婚してからは仕事を止めるべきだというのに反対です。
Dさん：自分もそう思います。もちろん両立は大変だろうけど、女性は結婚してからも仕事をする権利があると思います。
- (6) 今の発表はすばらしい発表だと思いますが、自分は少し違う意見があります。
- (4) 最近の配送会社は便利です。電話一本で取りに来てくれて、梱包もしてくれました。自分は家にいてお金を払うだけでした。
- (7) 自分は東京都内に住んでいます。節電はしたいが、かなり寒くなってきて暖房を付けて良いか迷っています。
- (9) 自分は、小泉が総理大臣になった時点で「あっ、もう郵便局は民営化されるのだな」と思ったものです。
- (5) 自分がパチスロをやめてから2ヶ月経ちましたが、強い意志が必要でした。
- (2) 今年は自分が東京に来て3年目です。

(きむ せつか 言語社会研究科博士課程)